

## 那波道円元和4年(1618)刊 古活字版『白氏文集』

神鷹 徳治\*

### 書誌

特大 三十冊 古活字版

四周双辺 有界9行16字(二二・八×十六・八糎)

目首題及序首題「白氏長慶集」 版心題「白集」 大黒口 双花魚尾

印記 「従五位小笠原長国納于□□□□館」(□は判読不明)

每冊巻頭に「金子蔵書」とあり。

### 書名について

本書<sup>1</sup>はその書名が日本では『白氏文集』、中国では『白氏長慶集』と呼ばれている。内容は同一である。この二種の書名について先ず説明することにする。「白氏集後記」に依れば、『白氏文集』は、以下の5本がそれぞれのテキストとして整理されている。

先ずは『白氏長慶集』50巻が最初に編集されている。元微之編 長慶4年(824)。時に、白氏は53歳。

---

\*かみたか・とくはる／文学部教授／中国文学

<sup>1</sup>明治大学図書館所蔵資料の請求記号・091.1/17//H

51 巻以後は、白氏自ら〈後集〉と命名し、75 歳 (846) の生涯を閉じるまで、5 本の全集が編集されている。

1. 太和元年 (827) 60 巻本 江州の東林寺に奉納。
2. 開成元年 (836) 65 巻本 洛陽の聖善寺に奉納
3. 開成 4 年 (839) 67 巻本 蘇州の南禅寺に奉納。
4. 会昌 2 年 (842) 前集 (即ち『白氏長慶集』50 巻)・後集 20 巻の 70 巻本の成立。
5. 会昌 5 年 (845) 〈続後集〉5 巻を加えて、75 巻本が完成する。

現存の宋刊本や那波本は、71 巻本となっている。その 71 巻本の実体は、恐らく 70 巻本が主体となり、晩年の〈続後集〉5 巻の作品の内、その大半はいつしか散乱し、刊本編集時の折、僅かに残存していた作品が 1 巻として蒐集され、70 巻本に加えられたのではあるまいか。

以上の如く、『白氏長慶集』に各本の〈後集〉及び〈続後集〉が追加されている本のテキストが存在していたわけである。従って、全体を総称すれば、『白氏文集』の方がふさわしいわけである。

それでは、何故、中国側では『白氏長慶集』の方が一般的なのであろうか。蓋し、『白氏長慶集』を長慶 4 年に編集した元稹は、2 年前の長慶 2 年には、宰相となっている。この宰相と云う肩書きが、中国文学の世界では、大きな意味を附与していたのではあるまいか。いずれの書名を取るにしても、内容は同じテキストであることを確認したい。

## 〈白氏文集〉の読み方

『白氏文集』の〈文集〉は、一般的には、〈もんじゅう〉と読まれている。しかし、〈文〉を〈もん〉とよむのは、後漢の漢字字典『説文解字』や、六朝文学の詞華集『文選』を前者は、〈せつもんかいじ〉、後者は、〈もんぜん〉と我が国では読まれているように、〈文〉は古い発音の呉音、即ち〈もん〉と読まれている。ところが、白樂天の作品集『白氏文集』は遣唐使が将来した作品であり、且つ固有名詞のはずである。とすれば、その発音は

唐代の音韻系であつた漢音の系統に属するので、〈文集〉は〈もんじゅう〉ではなく〈ぶんしゅう〉と漢音で読まれていたと推定される。それで、筆者はこのことを確認するために、国書に見られる〈文集〉の用例を博搜したところ、いずれも〈ぶんしゅう〉と読まれており〈もんじゅう〉と読む例を見い出すことはできなかったのである。そしてこの〈ぶんしゅう〉という読み方は、鎌倉・室町・江戸、明治20年代まで同一であることを再確認している。

それでは何故、〈もんじゅう〉と云う読み方が一般的になったのであろうか。これについては、以下の如きの私見を提出してみよう。即ち明治30年代に至ると、義務教育制度がほぼ普及している。その結果、小学校での作文教育が強化され、その具体的成果として“卒業文集”や“遠足文集”の如き“文集=作文もの”が簇生したわけである。古典研究家にとっては、『白氏文集』と『(遠足・卒業)文集』の〈文集〉が同音というのは忌忌しき現象と感じられたのではあるまいか。その結果、同音回避の現象として、当時の呉音復活の流れにうまく適応し、誠に自然に、日本古典学の分野から〈もんじゅう〉という読みが提唱され、現在に至るまで根拠のある古い読み方として定着していると思われる。もし、そうであるならば、〈もんじゅう〉という読み方は、意外にも明治30年代以降に成立した新しい読み方である可能性が強いのではあるまいか。この場を借りて歴史的には正しいと思われる〈ぶんしゅう〉と言う読み方を紹介するものである。

## 宋版の成立

次に、5本の定本が成立した、唐鈔本『白氏文集』のその後を少しく辿ってみることにする。

中国では、AD2世紀の頃、後漢の蔡倫が紙を本格的に改良して以来、長い間書籍は書写によって伝えられた。印刷術が本に応用されたのは、唐代で、それはまず仏教の經典の印刷から始まったとされる。仏教や暦以外に外典が出版されたのは10世紀前半の五代に始まるといわれている。したがって本が印刷され出したといっても、全体からすればごく一部で、ほとんどの本は依然として写本であつた。次の宋代に至り、ようやく従来まで

の写本による図書に、印刷された本、即ち刊本がとって代わり、図書の主流を占めることになったのである。このように現行漢籍のテキストの祖は宋版本に発し、かつ宋版はおおむね校訂が良いというので、テキストとして高く評価されているわけである。

『白氏文集』のテキストとしては、五本の定本の内、恐らく70巻本が最も普及したのではあるまいか。北宋期の版本は、唐鈔本を直接の底本としており、本文には若干の改変があったようである。しかし、その編成は、原本をほぼ踏襲していたようである。ところが、南宋期に至ると、本文とともに、詩文の編成にも大きな改変が加えられた。即ち、原編成の前集・後集・〔続集〕本が、バラバラに解体され、前詩・後文本と云う、科举受験者にとっては、まことに読み易い編成本が出現したのである。南宋までは、前集・後集・〔続集〕本と、前詩・後文本の二種が存在していたが、それも明代に至る頃には、不便な前集・後集・〔続集〕本は、遂にその姿を消したようである。従って、明版以降の中国側の『白氏文集』のテキストは、すべて前詩・後文〔前半が詩篇・後半が文章〕本となっている。

## 那波本の成立

それでは、南宋中期の刊本で、前集・後集・〔続後集〕本となっている原編成のテキスト本はどうなったのであろうか。その時期は不明であるがいつしか朝鮮に将来され、銅活字本として、刊行されている。さらにこの銅活字本を、整版本化したものが、現存する朝鮮版『白氏文集』の諸本である。最初の銅活字版を底本として、日本の出版文化史の華々しい開化宣言とも目される嵯峨本の一冊として刊行されたのが実に、今、我々が問題としている、このテキストである。

当時、出版界の大パトロン角倉素庵の庇護のもと、儒者の那波道円によって木活字を使用して刊行された。これが古活字版『白氏文集』と呼ばれるテキストである。従って、那波本『白氏文集』は、刊行された時期は、宋版と比較すると、凡そ250年後の出版でありながら、同時期に刊行された明版を凌駕する宋版の秀れた本文と唐鈔本の作品の旧編成を保持している。現在に至るも、学術的に寔に貴重なテキストとして高く評価されて

いる。

## 旧鈔本『白氏文集』

上述の如く、中国では北宋を経て、南宋代に至ると、印刷術が益々向上し、本格的四部(経・史・子・集)の漢籍も印刷化された。ところで、その宋版の底本となった唐鈔本の存在は、どうなったのであろうか。このことは、一見理解し難いことであるが、版本の刊行とともに、不要となった原資料は、急速に消滅したようである。現存の唐鈔本としては、西域の辺境から20世紀初頭、発見された敦煌写本が存在する。しかし、これ等は例外的資料と言えるもので、宋版を学術研究の基礎とする中国にとっては、貴重な資料ではあるが、その大半は、断簡零墨にすぎない。ところが、我が国には、奈良・平安朝期より伝存する漢籍の写本が存在している。最近の研究の成果によれば日本写本の直接の底本は、唐鈔本とされている。これらの資料は、遣唐使によって、日本にもたらされた唐鈔本が幾度か転写を重ねたもので、日本で書写されたテキストである。かくて、これらの旧鈔本を、中国における評価の高い宋版と比較すると、以下のことが明らかになっている。即ち、同一テキストであっても、その本文を詳しく吟味するならば、写本と刊本との間には断絶とも言うべきほどの本文の異同が存するということである。つまり、刊本以前の旧鈔本の方が、幾多の欠点はあるにせよ、原本の形態と文字をとどめているというわけである。特に、日本伝来の旧鈔本は、我が国における中国文化の尊重という事情も加わり、恣意的改変を免れ、それだけ唐鈔本の本文を忠実に伝えている。よく知られているその旧鈔本漢籍の一つが、金沢文庫旧蔵『白氏文集』である。即ち、中国では、既にその存在が消滅した唐鈔本の本文が、日本の旧鈔本資料に遺存していることが判明したわけである。

## 旧鈔本と刊行との邂逅

日本伝存の旧鈔本『白氏文集』は、唐鈔本の形式や本文をおおむね踏襲しているが、現存するものは、全70巻の内の約20巻に過ぎない。他の巻

数を補足するものが、即ち、古活字版『白氏文集』である。この両資料を対応させることによって、原本『白氏文集』が蘇生する可能性がでてくるわけである。

わが国で最初にこの両資料の重大な関係を把握した人物こそ、江戸初期の実業家であるとともに学術界の大パトロンであった角倉素庵(1571-1632)その人と推察される。素庵は、旧編成の朝鮮版『白氏文集』とともに、彼の経済力は、その座右に、旧鈔本の金沢文庫旧蔵『白氏文集』をいつとはなしに備えていたかと、これ又推測される。当時高名な漢学者であった林羅山の推薦を得て、素庵は那波道円に白羽の矢を立てて、彼の校定のもとに朝鮮版『白氏文集』を重刊したのである。即ち、古活字版那波本『白氏文集』の生誕である。その素庵は、那波本が刊行されるや、矢継ぎ早に金沢本『白氏文集』との校異を、那波本の潤沢な余白に書き入れた。(この手沢本は、宮内庁書陵部に現蔵されている。)

次いで、この両資料の関係を考察した研究者は、本書の旧蔵者、国文学者の金子彦二郎博士(1889-1958)である。博士は、この両資料の『白氏文集』を縦横に駆使した研究、『平安時代文学と白氏文集』により、昭和20年帝国学士院賞を授与されている。

以上述べた如く、本館の那波本『白氏文集』には旧鈔本との校異が書き入れられている。しかし、この校異の意義は、角倉素庵・金子彦二郎の兩人による研究で終了したわけではない。まだまだ種々の観点からの考察が必要であり、将来に亘り、原本『白氏文集』復元の貴重な一次資料としての学術的価値を保持しているテキストと言えよう。

## 参考文献

(単行本)

- [1] 花房英樹博士『白氏文集の批判的研究』(彙文堂、1961)
- [2] 平岡武夫氏『(校定本) 白氏文集』三冊(京都大学人文科学研究所、1971-73)

- [3] 太田次男博士『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』三冊 (勉誠社、1997)

#### (論文)

- [1] 森上 修「初期古活字版の印行者について－嵯峨の角倉 (吉田) 素庵をめぐって－」(『ビブリア』100号、1993・10)
- [2] 拙稿「悲劇の善本／朝鮮銅活字版『白氏文集』－那波本の生誕を繞って－」(『アジア遊学』12、勉誠出版、2001)
- [3] 大和文華館『特別展 没後 370 年記念 角倉素庵－光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で－』(大和文華館編集 2002・10)

#### 追記

宮内庁書陵部所蔵の角倉素庵、手沢本那波本『白氏文集』(巻4の末尾)と、大東急記念文庫蔵 金沢本『白氏文集』(巻4の末尾)の両資料に素庵の雅号〈西山期遠子貞子元識〉が記されていることを私は報告している。中国中世文学会 平成 17 年度研究大会での口頭発表「角倉素庵と『白氏文集』」